

---

---

## バウムガルテンの美学における蓋然性と真実らしさ

### —— 17世紀中葉以降の学問の拡張と美学の成立条件

桑原俊介（東京大学）

---

---

周知の通りバウムガルテンは、美学という学問を、「理性（知性）」に限定されていた学問領域を「感性」にまで拡張する試みとして構想した。ではそもそもなぜかかる「拡張」は可能になったのか。ないしその条件とは何か。本発表は、17世紀中葉に生じた「確率論革命（probabilistic Revolution）」に端を発する「蓋然性（probabilitas）」概念による学問の拡張——すなわち、学問領域を「確実性（certitudo）」に基づく「真理（veritas）」の領域から、「蓋然性」乃至「真実らしさ（verisimilitudo）」の領域に拡張する試み——が、論理学に類比的な学問、すなわち「理性に類比的なもの（analogon rationis）」としての感性を扱う美学を可能にしたひとつの学問論的・知識論的条件を構成したことを、古典古代のテキストからバウムガルテンまで、各種テキストに基づいて、概念史的に明らかにすることを目的とするものである。

デカルト以来、「学知（scientia）」は、「証明」に基づく「確実性」を有する「真理」に限定され、「証明」に基づけられない「蓋然性」乃至「真実らしさ」は、単に「権威」乃至「是認」に基づくものとして、学問の領域から厳格に排除された。だが1660年代、ハッキングが「確率論革命」と呼ぶ知識論的・学問論的大転換を通じて、「蓋然性」と「真実らしさ」が、学問的真理としてのステイタスを賦与されるようになる。自然科学においてそれは「統計」や「確率」として整備されるが、論理学においても「真理の度合い（gradus veri）」を「量化（Quantifizierung）」して学問的に処理する方法がライプニッツ、トマーゼウス、ヴォルフ等によって構想・整備されることで、学問の領域が大幅に「拡張」されることになる。バウムガルテンによる美学の構想も、このような「蓋然性」による学問の拡張という条件のもとでこそ可能になったと考えられる。

確かに、バウムガルテンは『美学講義』の中で、美学が「学知〔学問 scientia, Wissenschaft〕」であり、その「帰結」も「確実な根拠」に基づけられねばならないとするが、同時に彼は、かかる厳密な真理の領域は「極めて狭く」、美学の主体となる「美的精神は、かかる数少ない真理を決して措定しえない。いわんやそれを証明することはできない。（…）美的精神は、蓋然的に思考せねばならない（wahrscheinlich denken muß）」として、美学は「蓋然性」のみに基づけられうるとする。このように美学が「蓋然的」であるにもかかわらず「学知」として承認されうるとの論理を提供したもののひとつが、「蓋然性」概念による学問の拡張の論理であったと考えられるのである。

本発表ではそのために、美学における「蓋然性」と「真実らしさ」との相違を、それぞれの概念史的な系譜に即して明らかにする。また、バウムガルテンが美学を、単なる記述的な「学問」としてのみならず、実践的な「技法（ars）」としても規定した点にも注目する。

なるほど、先行研究においても美学の成立条件が議論されてきた。だがその多くが、「構想力」や「微小表象」といった美学の“内容”に関わるものである。だが本発表では、美学がそもそも学問として成立しうるとの学問的条件、すなわち美学の“形式的”条件が問われることになる。